日蓮大聖人御書全集

まつのどのごへんじ

松野殿御返事

じゅうしひぼう こと

(十四誹謗の事)

新版
1986
〜
1994

まつどののごへんじ じゅうしひぼう こと

松野殿御返事（十四誹謗の事）

けんじ ねん がつ にち

建治2年（'76）12月9日 55歳 松野六郎左衛門

がもくひとゆい はくまいいちだ しろこそでひと おく た お

鵜目一結・白米一駄・白小袖一つ、送り給び畢わんぬ。

やま もう みなみ のやままんまん ひやくより

そもそも、この山と申すは、南は野山漫々として百余里

およ きた みのべさんたか そばだ しらね たけ にし

に及べり。北は身延山高く峙つて白根が岳につづき、西に

しちめん もう やま がが はくせつた ひと す かいちう

は七面と申す山、峨々として白雪絶えず、人の住み家一字も

と 来 こぞえ つた えんこう

なし。たまたま問いくるものとしては、梢を伝う猿猴なれば、

すこ とど かえ いそ うら ひがし ふ

少しも留まることなく、還るさ急ぐ恨みなるかな。東は富

じかわみなぎ りゆうさ なみ こと ところ とぶら

士河漲つて流沙の浪に異ならず。かかる所なれば、訪う

ひと まれ

たびたびおとずれ

たも

ふしぎ

人も希なるに、かように度々音信せさせ給うこと、不思議の

なか ふしぎ

中の不思議なり。

じつそうじ

がくと

にちげん

にちれん

きぶく

しよりよう

す

実相寺の学徒・日源は、日蓮に帰伏して、所領を捨て、

でしだんな

はな

おわ

わ み

お どころ

弟子檀那に放され御座しまして、我が身だにも置き処なき

よしうけたまわ

そうろう

にちれん

とぶら

しゆそう

あわ

たも

由承り候に、日蓮を訪い、衆僧を哀れみさせ給うこ

まこと

どうしん

しょうにん

か ひと

むそう

かくしよう

と、誠の道心なり、聖人なり。すでに彼の人は無双の学生

みようもんみようり

す

それがし

でし

な

ぞかし。しかるに、名聞名利を捨てて某が弟子と成つて、

わ み

がふあいしんみよう

しゆぎよう

いた

ほとけ

ごおん

ほう

我が身には我不愛身命の修行を致し、仏の御恩を報ぜん

めんめん

きようけもう

くようとう

さき

と面々までも教化申し、かくのごとく供養等まで捧げしめ

給うこと、不思議なり。

たも
ふしぎ

くけん

そうに

ごうじゃ

ほとけ

と

「末世には、狗犬の僧尼は恒沙のごとし」と仏は説かせ

たま

そうろう

もん

こころ

まつせ

そう

びくに

みようもんみようり

給いて候なり。文の意は、末世の僧・比丘尼は、名聞名利

じゃく

うえ

けさごろも

き

かたち

そう

びくに

に

に著し、上には袈裟衣を着たれば形は僧・比丘尼に似た

ないしん

じゃけん

つるぎ

ひつさ

わ

でい

だんな

れども、内心には邪見の剣を提げて、我が出入りする檀那

もと

よ

そうに

寄

むりよう

ざんげん

いた

よ

そうに

の所へ余の僧尼をよせじと無量の讒言を致し、余の僧尼を

よ

だんな

お

たと

いぬ

さき

ひと

いえ

寄せずして檀那を惜しまんこと、譬えば犬が前に人の家に

いた

もの

え

く

のち

いぬ

きた

み

唾

吠

至つて物を得て食らうが、後に犬の来るを見ていがみほえ、

く

あ

こころ

食い合うがごとくなるべしという心なり。かくのごとき

そうに みなみな あくどう

がくと にちげん がくしよう

僧尼は、皆々、悪道に墮すべきなり。この学徒・日源は、学生

もん み たま こと ほか そうしゆ とぶら

なればこの文をや見させ給いけん、殊の外に僧衆を訪い

かえり たも まこと あ がた おほ そうろう

顧み給うこと、誠に有り難く覚え候。

おんふみ い きよう たも もう のち たいてん

御文に云わく「この経を持ち申して後、退転なく

じゆうによぜ じ がげ よ たてまつ だいもく とな もう そうろう

十如是・自我偈を読み奉り、題目を唱え申し候なり。

しょうにん とな たも だいもく くどく われ とな もう

ただし、聖人の唱えさせ給う題目の功德と、我らが唱え申

だいもく くどく ほど たしようそうろう うんぬん

す題目の功德と、いか程の多少候べきや」と云々。さら

しょうれつ そうろう

に勝劣あるべからず候。

ゆえ ぐしや も こがね ちしや も こがね

その故は、愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、

愚者の然せる火も智者の然せる火も、その差別なきなり。
ただし、この経の心に背いて唱えば、その差別有るべきなり。

この経の修行に重々のしなあり。その大概を申さば、

記の五に云わく「悪の数^{かず}を明^あかすとは、今の文^{もん}には説^{せつ}・不説^{ふせつ}

を云^いうのみ。ある人^{ひと}これを分^わかちて云^いわく、先に悪因^{あくいん}を列^{つら}ね、

次に悪果^{あくか}を列^{つら}ぬ。悪因^{あくいん}に十四^{じゅうし}あり。一^{いち}に憍慢^{きょうまん}、二^にに懈怠^{けたい}、

三^{さん}に計我^{けが}、四^しに浅識^{せんしき}、五^ごに著欲^{じゃくよく}、六^{ろく}に不解^{ふげ}、七^{しち}に不信^{ふしん}、八^{はち}に

颯^{ひんしゆく}、九^くに疑惑^{ぎわく}、十^{じゅう}に誹謗^{ひぼう}、十一^{じゅういち}に軽善^{きょうぜん}、十二^{じゅうに}に憎善^{ぞうぜん}、

じゆうさん しつぜん じゆうし こんぜん じゆうしひぼう ざいけ しゆつけ

十二に嫉善、十四に恨善なり」。この十四誹謗は在家・出家

わた おそ おそ

に亘るべし。恐るべし、恐るべし。

かこ ふきようぼさつ いっさいしゆじよう ぶつしよう ほけきよう たも

過去の不軽菩薩は、「一切衆生に仏性あり。法華經を持

かなら じようぶつ かれ かる ほとけ かる

てば必ず成仏すべし。彼を軽んじては仏を軽んずるにな

らいはい ぎよう た たま

るべし」とて、礼拝の行をば立てさせ給いしなり。法華經

たも もの たも たも ぶつしよう

を持たざる者をさえ、「もし持ちやせんずらん、仏性あり」

らいはい たも たも

とて、かくのごとく礼拝し給う。いかにいわんや、持てる

ざいけ しゆつけ もの きよう し まき ざいけ

在家・出家の者をや。この經の四の卷には「もしは在家に

しゆつけ ほけきよう たも と もの いちごん

てもあれ、出家にてもあれ、法華經を持ち説く者を一言に

そし

つみおお

しやかぶつ

いつこう

あいだ

ても毀ることあらば、その罪多きこと、釈迦仏を一劫の間

ただ

そし

たてまつ

つみ

すぐ

み

直ちに毀り奉る罪には勝れたり」と見えたり。あるいは

じつ

ふじつ

と

「もしは実にもあれ、もしは不実にもあれ」とも説かれた

り。

おも

わす

ほけきよう

たも

もの

これをもつてこれを思うに、忘れても法華經を持つ者を

たが

そし

ゆえ

ほけきよう

たも

もの

ば互いに毀るべからざるか。その故は、法華經を持つ者は

かなら

みなほとけ

ほとけ

そし

つみ

う

必ず皆仏なり、仏を毀つては罪を得るなり。

こころえ

とな

だいもく

くどく

しやくそん

おんくどく

かように心得て唱うる題目の功德は、釈尊の御功德と

ひと

しやく

い

あび

えししよう

まった

ごくししよう

等しかるべし。釈に云わく「阿鼻の依正は全く極聖の

自身に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云々。十四
ひぼう ころろ もん まか すいりよう
誹謗の心は文に任せて推量あるべし。

かように法門を御尋ね候こと、誠に後世を願わせ給う
ほうもん おんたず そうろう まこと ごせ ねが たも

人か。「能くこの法を聴く者、この人もまた難し」とて、こ
ひと よ ほう き もの ひと ひと かつ

の経は正しき仏の御使い世に出でずんば、仏の御本意の
きよう まさ ほとけ おんつか よ い ほとけ ごほんい

ごとく説くこと難き上、この経のいわれを問い尋ねて、
と かつ うえ きよう 謂 と たず

不審を明らめ、能く信ずる者、難かるべしと見えて候。
ふしん あき よ しん もの かつ み そうろう

いかに賤しき者なりとも少し我より勝れて智慧ある人に
いや もの すこ われ すぐ ちえ ひと

は、この経のいわれを問い尋ね給うべし。しかるに、悪世
きよう 謂 と たず たも あくせ

しゆじよう がまんへんしゆう みようもんみようり じゃく かれ でし な
の衆生は我慢偏執・名聞名利に著して「彼が弟子と成る

べきか、彼に物を習わば、人にや賤しく思われんずらん」
かれ もの なら ひと いや おも

と不断に悪念に住して悪道に墮すべしと見えて候。
ふだん あくねん じゆう あくどう だ み そうろう

法師品には「人有つて八十億劫の間、無量の宝を尽くし
ほっしほん ひとあ はちじゆうおくごう あいだ むりよう たから つ

て仏を供養し奉らん功德よりも、法華経を説かん僧を
ほとけ くよう たてまつ くどく ほけきよう と そう

供養して、後に須臾の間もこの経の法門を聴聞すること
くよう のち しゆゆ あいだ きよう ほうもん ちようもん

あらば、我大いなる利益・功德を得べしと悦ぶべし」と見
われおお りやき くどく う よろこ み

えたり。無智の者は、この経を説く者に使われて功德をう
むち もの きよう と もの つか くどく 得

べし。いかなる鬼畜なりとも法華経の一偈一句をも説かん
きちく ほけきよう いちげいっく と

もの まさ た とお むか まさ ほとけ うやま
者をば「当に起つて遠く迎うべきこと、当に仏を敬うが

ごとくすべし」の道理なれば、仏のごとく互いに敬うべ

し。例せば、宝塔品の時の釈迦・多宝のごとくなるべし。

この三位房は下劣の者なれども、少分も法華經の法門を

申す者なれば、仏のごとく敬つて法門を御尋ねあるべし。

「法に依つて人に依らざれ、これを思うべし。

されば、昔独りの人有つて雪山と申す山に住み給いき。

その名を雪山童子という。蕨をおり、菓を拾つて命をつ

ぎ、鹿の皮を着物とこしらえ肌をかくし、閑かに道を行じ

たま
給いき。

せつせんどうじ 思

この雪山童子おもわれけるは、「つらつら世間を觀ずるに、

せけん かん

しょうじむじょう ことわり

しょう もの かなら し

生死無常の理なれば、生ずる者は必ず死す。されば、憂

よ なか 徒 果 無

たと でんこう

あさつゆ

き世の中のあだはかなきこと、譬えば電光のごとく、朝露の

ひ む き に かぜ まえ ともしび き

日に向かつて消ゆるに似たり。風の前の灯の消えやすく、

ばしょう は やぶ こと ひとみな むじょう のが

芭蕉の葉の破れやすきに異ならず。人皆この無常を遁れず。

つい いちど こうせん たび おもむ めいど たび おも

終に一度は黄泉の旅に趣くべし。しかれば、冥途の旅を思

あんあん 暗 にちがつ しょうしゆく ひかり

うに、闇々としてくらければ、日月・星宿の光もなく、

とうしよく 点 ひ くら みち

せめて灯燭とて、ともす火だにもなし。かかる闇き道にま

伴 ひと

しやば

とき

しんるい

きようだい

さいし

たともなう人もなし。娑婆にある時は親類・兄弟・妻子・

けんぞくあつ

ちち いづく

こころざしたか

はは かな

なさ

眷属集まつて、父は慈しみの志高く、母は悲しみの情け

ふか

ふさい かいろうどうけつ

ちぎ

たいかい

海老

おな

深く、夫妻は海老同穴の契りとて、大海にあるえびは同じ

ちくしやう

ふさい 契 こま

いっしやういっしよ

伴

く畜生ながら夫妻ちぎり細やかに一生一処にともないて

はな

さ

えんおう

ふすま

した

まくら

なら

離れ去ることなきがごとく、鴛鴦の衾の下に枕を並べて

あそ

たわむ

なか

か

めいど

たび

ともな

遊び戯るる中なれども、彼の冥途の旅には伴うことなし。

めいめい

ひと

い

たれ

きた

ぜ ひ

とごら

冥々として独り行く。誰か来つて是非を訪わんや。あるい

ろうしやうふじやう

さかい

お

さきだ

わか

とど

は老少不定の境なれば、老いたるは先立ち、若きは留ま

じゆんじ

どうり

なげ

なか

おも

る。これは順次の道理なり。歎きの中にも、せめて思い

慰

かた

あ

お

とど

わか

さきだ

なぐさむ方も有りぬべし。老いたるは留まり、若きは先立つ。

うら

いた

うら

おさな

おや

さきだ

こ

されば、恨みの至つて恨めしきは、幼くして親に先立つ子、

なげ

いた

なげ

お

こ

さきだ

おや

歎きの至つて歎かしきは、老いて子を先立つる親なり。か

しょうじむじょう

ろうしょうふじょう

さかい

徒

果

無

よ

くのごとく、生死無常、老少不定の境、あだにはかなき世

なか

ちゅうや

こんじょう

たぐわ

おも

ちようせき

げんぜ

の中に、ただ昼夜に今生の貯えをのみ思い、朝夕に現世

わざ

ほとけ

うやま

ほう

しん

むぎよう

の業をのみなして、仏をも敬わず法をも信ぜず、無行・

むち

あ

く

えんま

ちようてい

ひ

無智にしていたずらに明かし暮らして、閻魔の庁庭に引き

むか

とき

なに

しりよう

さんがい

ちようと

い

迎えられん時は、何をもつてか資糧として三界の長途を行

なに

せんぼつ

しょうじ

こうかい

わた

じつぼう

じゃっこう

き、何をもつて船筏として生死の曠海を渡つて実報・寂光

の仏土に至らんや」と思い、「迷えば夢、覚れば寤。しか

じ、夢の憂き世を捨てて寤の覚りを求めんには」と思惟し、

彼の山に籠もつて観念の牀の上に妄想・顛倒の塵を払い、

ひとえに仏法を求め給うところに、帝釈、遙かに天より見

下ろし給いて思しめさるる様は、「魚の子は多けれども魚と

なるは少なく、菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少な

し。人もまたかくのごとし。菩提心を発す人は多けれども、

退せずして実の道に入る者は少なし。すべて凡夫の菩提心

は、多く悪縁にたぼらかされ、事にふれて移りやすきもの

なり。よろいよろい 鎧きを着たる兵者は多けれども、戦いくさに恐れをなさざ

るは少なきがごとし。この人の意を行つて試みばや」と思おも

つて、帝釈たいしやく、鬼神きじんの形を現じ、童子どうじの側に立ち給う。

その時とき、仏世ほとけにましまさざれば、雪山童子せつせんどうじあまねく

大乘経だいじようきようを求むるに、聞きくことあたわず。時にとき、「諸行しよぎようは

無常むじようなり。これ生滅しやうめつの法ほうなり」と云う音い、ほのかに聞きこゆ。

童子どうじ驚おどろき、四方しほうを見給うに人もなし。ただ鬼神きじん近ち付かづいて立た

ちたり。その形かたちけわしくおそろしくして、頭かしらのかみは炎ほのお

のごとく、口くちの齒はは劍つるぎのごとく、目めを瞋いからして雪山童子せつせんどうじを

目守 たてまつ

み おそ

ぶつぼう き

まぼり奉る。これを見るにも恐れず、ひとえに仏法を聞か

よろこ

あや

たと

はは はな

んことを喜び、怪しむことなし。譬えば、母を離れたる

仔牛

はは こえ き

こうし、ほのかに母の音を聞きつるがごとし。

たれ じゆ

のこ ことば

「このこと、誰か誦しつるぞ。いまだ残りの語あらん」

たず もと

ひと

とて、あまねく尋ね求むるに、さらに人もなければ、「もし

ことば きじん と

うたが

もこの語は鬼神の説きつるか」と疑えども、「よも、さは

おも

か み

ざいほう

きじん

かたち

げ

あらし」と思い、「彼の身は罪報の鬼神の形なり。この偈は

ほとけ

と

たま

ことば

いや

きじん

くち

い

仏の説き給える語なり。かかる賤しき鬼神の口より出ず

おも

こと ひと

べからず」とは思えども、また殊に人もなければ、「もし、

この語、汝が説きつるか」と問えば、鬼神答えて云わく

「我に物な云いそ。食せずして日数を経ぬれば、飢え疲れ

て正念を覚えぬ。既にあだごと云いつるならん。我うつけ

る意にて云えば、知ることあらじ」と答う。

童子の云わく「我はこの半偈を聞きつること、半ばなる月

を見るがごとく、半ばなる玉を得るに似たり。たしかに汝

が語なり。願わくは、残れる偈を説き給え」とのたまう。

鬼神の云わく「汝は本より悟りあれば、聞かずとも恨みは

有るべからず。吾は、今、飢えに責められたれば、物を云う

べき力なし。すべて我に向かつて物な云いそ」と云う。童子
なほ「物を食いては説かんや」と問う。鬼神答えて「食
ては説きてん」と云う。童子悦んで「さて何物をか食とす
るぞ」と問えば、鬼神の云わく「汝さらに問うべからず。
これを聞いては必ず恐れを成さん。また汝が求むべき物
にもあらず」と云えば、童子なお責めて問い給わく「その物
をとだにも云わば、心みにも求めん」とのたまえば、鬼神
の云わく「我は、ただ人の和らかなる肉を食し、人のあたた
かなる血を飲む。空を飛びあまねく求むれども、人をば各

ちから

われむ

ものい

どうじ

ものく

と

と

きじんこた

く

と

い

どうじよろこ

なにもの

じき

と

きじん

い

なんじ

と

かなら

おそ

な

なんじ

もと

もの

き

かなら

おそ

な

なんじ

もと

もの

い

どうじ

もと

宣

きじん

い

われ

ひと

やわ

にく

しよく

ひと

温

ち

の

そら

と

もと

ひと

おのおの

かなる血を飲む。空を飛びあまねく求むれども、人をば各

まも たも ぶつしん

こころ まか ころ

ぶつしん

守り給う仏神ましませば、心に任せて殺しがたし。仏神の

す たも しゅじょう ころ じき

い

捨て給う衆生を殺して食するなり」と云う。

とき せつせんだうじ おも たま われ ほう み す

その時、雪山童子の思い給わく「我、法のために身を捨て

げ き お おも なんじ しょくもつ

て、この偈を聞き畢わらん」と思つて、「汝が食物ここに

あ そと もと わ み し にく

有り。外に求むべきにあらず。我が身いまだ死せず。その肉

温

あたたかなり。我が身いまだ寒えず。その血あたたかなり

ねが のこ げ と たま み なんじ あた

ん。願わくは、残りの偈を説き給え。この身を汝に与えん」

い とき きじん おお いか い たれ なんじ ことば まこと

と云う。時に鬼神、大いに瞋つて云わく「誰か汝が語を突

たの き のち たれ しょうにん ただ

とは憑むべき。聞いて後には誰をか証人として糾さん」と

い せつせんどうじ 雲う。雪山童子の云わく「この身は終に死すべし。いたず

らに死せん命を法のために投げば、きたなくけがらわしき

身を捨てて、後生は必ず覚りを開き、仏となり、清妙な

る身を受くべし。土器を捨てて宝器に替うるがごとくなる

べし。梵天・帝釈・四大天王・十方の諸の仏菩薩を皆証人

とせん。我さらに偽るべからず」とのたまえり。その時、

鬼神少し和らいで、「もし汝が云うところ実ならば、偈を

説かん」と云う。その時、雪山童子大いに悦んで、身に着

たる鹿の皮を脱いで法座に敷き、頭を地に付け、掌を合

ひざまず
ねが
のこ
げ
と
たま
わ
せ
跪
き、
「ただ願わくは、我がために残りの偈を説き給
え」と云つて、
い
ししん
ふか
うやま
たも
ほうざ
のぼ
至心に深く敬い給う。さて、
きじん
げ
と
い
しょうめつめつ
お
じゃくめつ
らく
法座に登り、
鬼神、偈を説いて云わく「生滅滅し已わつて、寂滅を樂と
なす」。

とき
せつせんどうじ
き
よろこ
たつと
たも
かぎ
この時、雪山童子これを聞き、
ごせ
わす
たびたびじゆ
ふか
こころ
染
悦び貴み給うこと限り
なく、後世までも忘れじと、
ほとけ
と
たま
こと
度々誦して深くその心にそめ、

よろこ
「悦ばしきところは、これ仏の説き給えるにも異ならず。
なげ
なげ
われいちにん
き
ひと
つた
歎かわしきところは、
ふか
おも
いし
うえ
かべ
おもて
みち
ほとり
しよもく
一人のみ聞いて人のために伝えざ
らんことを」と深く思つて、
石の上・壁の面・路の辺の諸木

ごとげにこの偈ねがを書き付け、「願のちわくは、後きらに来らん人、必ひとず

この文もんを見、その義理ぎりをさとり、実まことの道どうに入れ」と云いい畢お

わつて、即すなわち高たかき木きに登のぼつて、鬼神きじんの前まえに落おち給たまえり。

いまだ地じに至いたらざるに、鬼神きじん、にわかたいしゃくに帝釈かたちの形なと成なつ

て、雪山童子せつせんどうじのその身みを受け取うつて、平たいらかなる所ところにすえ

奉たてまつつて、恭敬くぎよう・礼拝らいはいして云いわく「我われしばらく如来にょらいの聖教しょうぎよう

を惜おしんで、試こころみに菩薩ぼさつの心こころを悩なやまし奉たてまつるなり。願ねがわ

くは、この罪つみを許ゆるして、後世ごせには必かならず救すくい給たまえ」と云いう。

一切いっさいの天人てんにんまた来きたつて「善よきかな、善よきかな。実まことにこれ菩薩ぼさつ

なり」と讚め給う。ほ たも はんげ 半偈のために身を投げて、み な 十二劫、じゆうにこう 生死

の罪を滅し給えり。つみ めつ たま このこと涅槃經に見えたり。ねはんぎよう み

しかれば、雪山童子の古を思えば、せつせんだうじ いにしえ おも はんげ 半偈のためになお

命を捨て給う。いのち す たも いかにいわんや、この經の一品一卷をきよう いっぽんいっかん

聴聞せん恩徳をや。ちようもん おんとく なに 何をもつてかこれを報ぜん。ほう もつとも

後世を願わんには、ごせ ねが 彼の雪山童子のごとくこそあらまほしか せつせんだうじ

くは候え。そうら まこと わ みひん ふせ たから 誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば、我わ

が身命を捨てて仏法を得べき便りあらば、しんみよう す ぶつぽう う たよ 身命を捨てて

仏法を学すべし。ぶつぽう がく

とてもこの身はいたずらに山野の土と成るべし。惜しみ

なに

み

お

お

遂

な

ひとひさ

ても何かせん。惜しむとも惜しみとぐべからず。人久しと

ひやくねん

す

あいだ

いつすい

ゆめ

いえども百年には過ぎず。その間のことはただ一睡の夢

じんしん

え

しゅつけ

もの

ぞかし。受けがたき人身を得て、たまたま出家せる者も、

ぶつぼう

がく

ほうぼう

もの

せ

ゆげ

ぞうだん

仏法を学し謗法の者を責めずして、いたずらに遊戯・雑談の

あ

く

もの

ほつし

かわ

き

ちくしやう

みして明かし暮らさん者は、法師の皮を着たる畜生なり。

ほつし

な

か

よ

わた

み

やしな

ほつし

法師の名を借りて世を渡り身を養うといえども、法師とな

ぎ

ひと

ほつし

みやうじ

盗

ぬすびと

は

る義は一つもなし。法師という名字をぬすめる盗人なり。恥

おそ

ずべし、恐るべし。

しやくもん

われ しんみよう あい

むじようどう

お

迹門には「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむの

説

ほんもん

みずか

しんみよう

お

み」ととき、本門には「自ら身命を惜しまず」ととき、

ねはんぎよう

み

かる

ほう

おも

み

ころ

ほう

ひろ

涅槃経には「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」と見

ほんじやくりようもん

ねはんぎよう

とも

しんみよう

す

ほう

ひろ

えたり。本迹両門、涅槃経、共に身命を捨てて法を弘む

み

いまし

そむ

じゆうざい

め

み

べしと見えたり。これらの禁めを背く重罪は、目には見え

つ

じごく

お

たと

かんねつ

ざれども、積もりて地獄に墮つること、譬えば、寒熱の

すがたかたち

まなこ

み

ふゆ

かんきた

そうもく

姿形もなく眼には見えざれども、冬は寒来つて草木・

にんちく

責

なつ

ねつきた

にんちく

ねつのう

人畜をせめ、夏は熱来つて人畜を熱悩せしむるがごとくな

るべし。

ざいけ おんみ

よねん

なんみようほうれんげきよう

しかるに、在家の御身は、ただ余念なく南無妙法蓮華経と

おんとな

そう

くよう

たも

かんじん

そうろう

御唱えありて、僧をも供養し給うが肝心にて候なり。そ

きようもん

ずいりきえんぜつ

あ

れも、経文のごとくならば、随力演説も有るべきか。

よ

なか 物 憂

とき

こんじよう

く

悲

世の中ものうからん時も「今生の苦さえかなしし、いわ

らいせ

おぼ

なんみようほうれんげきよう

とな

んや来世の苦をや」と思しめしても南無妙法蓮華経と唱え、

よろこ

とき

こんじよう

よろこ

ゆめ

なか

ゆめ

りようぜんじようど

悦ばしからん時も「今生の悦びは夢の中の夢、霊山浄土

よろこ

まこと

よろこ

おぼ

あ

の悦びこそ実の悦びなれ」と思しめし合わせて、また

なんみようほうれんげきよう

とな

たいてん

しゆぎよう

さいごりんじゆう

とき

南無妙法蓮華経と唱え、退転なく修行して最後臨終の時

ま

ごらん

みようかく

やま

はし

のぼ

しほう

み

を待って御覧ぜよ。妙覚の山に走り登って四方をきつと見

おもしろ

ほうかいじやつこうど

るり

じ

るならば、あら面白や、法界寂光土にして、瑠璃をもつて地

こがね

なわ

やつ

みち

さか

てん

ししゆ

はな

とし、金の縄をもつて八つの道を界えり。天より四種の花

降

こくう

おんがくき

もろもろ

ぶつぼさつ

じようらくがじよう

かせ

ふり、虚空に音楽聞こえて、諸の仏菩薩は常樂我淨の風

ごらく

けらく

たも

われ

かず

つら

にそよめき、娯樂・快樂し給うぞや。我らもその数に列な

ゆげ

たの

ちか

しんじんよわ

りて遊戯し楽しむべきこと、はや近づけり。信心弱くして

ところ

い

い

ふしん

は、かかるめでたき所に行くべからず、行くべからず。不審

うけたまわ

そうろう

のことをば、なおなお承るべく候。あなかしこ、あな

かしこ。

けんじにねんひのえねじゆうにがつこのか

にちれん

かおう

建治二年丙子十二月九日

日蓮

花押

まつのだのごへんじ
松野殿御返事